

西方指南抄の漢文訓読語について

——書状掲載語彙の性差、有識差の視点から——

金子 彰

目次

- 一 はじめに
- 二 いわゆる二形対立の語について
- 三 漢文訓読語について
- 四 漢文訓読語と性差・有識差
- 五 直筆書状の漢文訓読語との比較
- 六 むすび

一 はじめに

西方指南抄は、法然（長承二年（一一三三）～建暦二年（一一二二））の言行録として輯録された最初のもので、門下の親鸞（承安三年（一一七三）～弘長二年（一二六二））がみずからの手によって編集、書写したものである。¹⁾親鸞八十四歳（康元元年（一二五六））の冬から八十五歳の春にかけて、六帖が次々と成立した。内容は二八篇からなるが、その中に法然十通の片仮名交じり書状が見られる。これらの書状は親鸞が忠実に書写したのか、親鸞の表記法により改編されたものか

西方指南抄の漢文訓読語について

等は、法然の直筆が伝存しない以上判断できないが、この親鸞書写本によって今日に伝わる貴重なものである。

この掲載書状十通には、発信者が受信者の性差や、仮に名付ける有識差等を意識したかとみられる語彙の使用が窺われる。このことのひとつは以前報告をしたことがある⁽²⁾。それは、発信者法然が近侍の僧や東大寺復興の勸進僧、都の高級官吏等宛には漢語を漢字表記しているのに、受信者が女性宛や地方から上京しその時に自己の教化を受けた御家人宛等には仮名書き漢語等が見られたということである。

本稿では、別の語彙を取り上げ、前稿で見られたような表現行為が存しているのか検討してみる。分析の視点とするのは、築島裕博士が平安時代に於ける存在を指摘された漢文訓読語と和文語との二形対立の語群である⁽³⁾。博士が説かれる如くこれら和文語、漢文訓読語の対立関係の奥にあるものは男性、女性のことばの違いというよりは「漢文訓読文」と「和文」というものとの表現機構の相違に基づく⁽⁴⁾ということとは納得できることではあるが、鎌倉時代の二形対立の実態を位相論の立場から分析してみようと思うのである。発信者が受信者の性差や、有識差等をも配慮した表現行為を二形対立の語彙でも行っているのであるかという点を確認してみたい。

十通を示す。(十二等は西方指南抄の篇番号、七八四等は複製本のページ行数を示す)

(篇) (所在)

(文体)

(受信者)

十二 中末(七八四〜一〇七三)

仮名 漢文 鎌倉二品比丘尼へ御返事(北条政子、源頼朝夫人)

十四 下本(三一〜三一二)

仮名 漢文 念仏の事御返事(十五の夫人か)

十五 下本(三四四〜九〇六)

仮名 漢文 おぼごの太郎へ御返事(上野國のご家人、在京時に法然の教化をうける)

十六 下本(九一〜一三二四)

仮名 しゃう如ばうへ御消息(後白河天皇の第三皇女、承如法の法号を
持つ式子内親王)

十七 下本 (一三二一〜一四〇三) 仮名 漢文 故聖人の御坊の御消息 (俗称・生国不詳、法然に師事し後に越後に趣き布教活動)

十九 下本 (一五二五〜一五五三) 仮名 基親上書の御返事 (藏人の補され、後に従三位)

二三 下末 (四三〜十一一) 仮名 法語 (末代の衆生を云々) (未詳。伊賀の國名張にいた俊乗房重源

か)

二五 下末 (六七一〜七五一) 仮名 九条殿北政所御返事 (摂政良経や宣秋門院 (後鳥羽天皇) の生母。法然から受戒)

二六 下末 (七五二〜七七二) 仮名 九月十六日付御返事 (熊谷入道直実)

二八 下末 (二七八一〜二〇五二) 仮名 漢文 つのとの三郎殿御返事 (法名は為守。法然に帰依し尊願と号した念仏者)

二 いわゆる二形対立の語について

西方指南抄掲載の各書状は分量に長短があるが、漢文訓読語と和文語との出現状況は以下のとおりである。(西方指南抄の仮名遣いで示す。和文語は平仮名で、漢文訓読語は片仮名で示す)

十二篇 和文語 異なり語数 16 延べ語数 32

ぬ 8 ね 1 で 1 されば 1 いよいよ 1 はやく 1 もしは 1 いたる 1 おはす 2 かざる 2

きほふ 1 競 (きほふ) 1 く 1 ねがふ 3 へだつ 2 まうく 1 ひとびと 4

訓読語 異なり語数 9 延べ語数 21

ゴトシ 2 シム 1 ザル 2 ブシテ 8 イマダ 1 未 (イマダ) 1 オヨブ 1 キタル 1 トモガラ 2 輩

西方指南抄の漢文訓読語について

十四篇

和文語 異なり語数7 延べ語数11
 (トモガラ) 1 マナコ1

す・さす2 ぬ1 されば2 いよいよ1 いたる1 ねがふ3 しげし1
 訓読語 異なり語数10 延べ語数26

ゴトシ1 如(ゴトシ)2 ザル9 ザレ1 ブシテ4 カルガユヘニ3 シカルニ2 イマダ1 スデニ1
 オヨブ1 マシマス1

十五篇

和文語 異なり語数18 延べ語数64

やうなり3 す・さす3 ぬ24 ね5 で1 きて1 されば4 いよいよ1 おほかた1 かねて1
 すべて3 しげし1 いみじ1 いたる1 おはします1 たまふ1 ねがふ8 ひとびと4

訓読語 異なり語数12 延べ語数34

ゴトシ1 シム1 ザル6 ブシテ8 シカルニ3 イマダ2 スデニ3 オヨブ4 オソル2 キタル2
 ソナフ1 マジハル1

十六篇

和文語 異なり語数16 延べ語数61

やうなり4 す・さす18 ぬ8 ね1 で2 きて1 されば1 いよいよ1 おほかた1 しばし1
 ときに1 いたる1 おはします18 ほむ1 ひとびと1 め1

訓読語 異なり語数14 延べ語数24

ゴトシ2 シム1 ネガワクワ1 イハムヤ1 イマダ2 タガヒニ1 コトゴトク3 マノアタリ1
 スデニ2 アタハズ1 オヨブ4 オソル2 キタル2 フサグ1

十七篇

和文語 異なり語数1 延べ語数1

いたる 1

訓読語 異なり語数 9 延べ語数 13

ザル 2 ザレ 1 シカルラ 1 イハムヤ 1 ホボ 1 オヨブ 2 オソル 1 シリゾク 1 トモガラ 3

十九篇

和文語 異なり語数 2 延べ語数 2

す・さす 1 め 1

訓読語 異なり語数 8 延べ語数 10

シム 1 ザル 2 シカルニ 2 ホボ 1 スデニ 1 オヨブ 1 キタル 1 オソル 1

二三篇

和文語 異なり語数 0 延べ語数 0

訓読語 異なり語数 2 延べ語数 3

イハムヤ 2 キタル 1

二五篇

和文語 異なり語数 4 延べ語数 7

す・さす 3 ぬ 1 すべて 1 おはします 2

訓読語 異なり語数 3 延べ語数 6

ザル 4 シカルニ 1 キハム 1

二六篇

和文語 異なり語数 1 延べ語数 1

ねがふ 1

訓読語 異なり語数 2 延べ語数 2

コトゴトク 1 スデニ 1

二八篇

和文語 異なり語数 15 延べ語数 32

西方指南抄の漢文訓読語について

す・さす 8 ぬ 3 ね 1 されば 3 いたく 1 おほかた 1 とし 1 いたる 1 おはします 1
 かぎる 4 きほふ 1 く 1 ねがふ 3 へだつ 1 ひとびと 2

訓読語 異なり語数 8 延べ語数 14

ガル 3 シカラバ 1 シカルニ 1 イマダ 1 オヨブ 4 キハム 1 トモガラ 1 輩(トモガラ) 1 マナ
 コ 1

右の数値を受信者別の数値に直してみる。そうすると各書状は統一して和文語を使用するとか、漢文訓読語を使用する
 という語彙の状況ではないが、書状ごとに漢文訓読語の多いものや和文語が多いもの等の傾向があることがわかる。

(受信者)

(行数)

(異なり語数)

(延べ語数)

	(和文語)	漢文訓読語	(和文語)	漢文訓読語
十二篇 北条政子、源頼朝夫人	1 6 2	1 6	9	3 2
十四篇 大胡太郎の夫人	1 6 9	7	1 0	1 1
十五篇 上野國のご家人、大胡太郎	3 5 4	1 8	1 2	6 4
十六篇 式子内親王	2 4 4	1 6	1 4	6 1
十七篇 光明房	5 1	1	9	1
十九篇 平基親	1 7	2	8	2
二三篇 俊乗房重源か	4 1	0	2	0
二五篇 藤原謙子	4 8	4	3	7
二六篇 熊谷入道直実	1 3	1	2	1
二八篇 津戸三郎	1 6 4	1 5	8	3 2

右から窺われる二形対立は、二五・二六篇は語数も少なく、顕著な傾向を示してはいないが数値に従って分類しておく。

和文語が多い書状 十二、十五、十六、二五、二八篇

漢文訓読語が多い書状 十四、十七、十九、二三、二六篇

右掲の結果から更に次のことがわかる。即ち受信者の性差による傾向である。

漢文訓読語が多く見られる書状の受信者は、十四篇の大胡太郎の妻宛以外は男性宛になっている。

和文語の方が多く見られる書状の受信者は、男性と女性（十四篇の大胡太郎の妻宛以外）とが見られる。

更に書状を受信者の性差のみでなく、発信者法然との関係等を考えて次のように分けてみる。前稿の漢語の表記と同様男性も2グループに分けることができようか。

男性1（十七、十九、二三、二六篇）

男性2（十五、二八篇）

女性（十二、十四、十六、二五篇）

男性1は、十七篇が越後に趣き布教活動した聖人、十九篇が都の高級官吏、二三篇が東大寺復興の勳進僧、二六篇が法然近侍の僧等である。この受信者は当時の有識者とみられる人々である。

男性2は、十五篇が大胡太郎で上野国の御家人であり、上京時に法然の教化を受けた者、二八篇が武蔵野国の住人で御家人であり、建久六年（一一九五）頼朝に従って上洛し、その機会を得て法然に会って帰依し、以後尊顔と云って熱心な念仏者になったという者である。彼らは法然の信者であり男性1とは法然との接し方が異なる者達であろう。

因みに女性は、十二篇が庇護者の一人頼朝夫人、二五篇が摂政良経や後鳥羽天皇の生母、十六篇が法然と親しい間柄であったといわれる皇族の式子内親王、十四篇が大胡太郎の妻宛となっている。

以下この分類での語彙の延べ語数を示してみる。

(受信者)

(和文語 漢文訓読語)

	男性1	男性2	女性
十七篇	越後に趣き布教活動した聖人		
十九篇	従三位の基親		
二三篇	俊乗房重源か		
二六篇	熊谷入道直実		
十五篇	大胡太郎	十五篇	大胡太郎
二八篇	津戸三郎	二八篇	津戸三郎
十二篇	北条政子、源頼朝夫人	十二篇	北条政子、源頼朝夫人
十四篇	大胡太郎の夫人	十四篇	大胡太郎の夫人
十六篇	式子内親王	十六篇	式子内親王
二五篇	藤原謙子	二五篇	藤原謙子
	1	6	3
	1	4	2
	2	3	1
	0	2	2
	3	1	1
	1	2	2
	3	4	1
	0	3	3
	1	2	2
	3	4	1
	1	3	3
	3	4	1
	0	2	2
	3	1	1
	1	2	2
	3	4	1
	0	3	3
	1	2	2
	3	4	1
	1	3	3
	3	4	1
	0	2	2
	3	1	1
	1	2	2
	3	4	1
	0	3	3
	1	2	2
	3	4	1
	1	3	3
	3	4	1
	0	2	2
	3	1	1
	1	2	2
	3	4	1
	0	3	3
	1	2	2
	3	4	1
	1	3	3
	3	4	1
	0	2	2
	3	1	1
	1	2	2
	3	4	1
	0	3	3
	1	2	2
	3	4	1
	1	3	3
	3	4	1
	0	2	2
	3	1	1
	1	2	2
	3	4	1
	0	3	3
	1	2	2
	3	4	1
	1	3	3
	3	4	1
	0	2	2
	3	1	1
	1	2	2
	3	4	1
	0	3	3
	1	2	2
	3	4	1
	1	3	3
	3	4	1
	0	2	2
	3	1	1
	1	2	2
	3	4	1
	0	3	3
	1	2	2
	3	4	1
	1	3	3
	3	4	1
	0	2	2
	3	1	1
	1	2	2
	3	4	1
	0	3	3
	1	2	2
	3	4	1
	1	3	3
	3	4	1
	0	2	2
	3	1	1
	1	2	2
	3	4	1
	0	3	3
	1	2	2
	3	4	1
	1	3	3
	3	4	1
	0	2	2
	3	1	1
	1	2	2
	3	4	1
	0	3	3
	1	2	2
	3	4	1
	1	3	3
	3	4	1
	0	2	2
	3	1	1
	1	2	2
	3	4	1
	0	3	3
	1	2	2
	3	4	1
	1	3	3
	3	4	1
	0	2	2
	3	1	1
	1	2	2
	3	4	1
	0	3	3
	1	2	2
	3	4	1
	1	3	3
	3	4	1
	0	2	2
	3	1	1
	1	2	2
	3	4	1
	0	3	3
	1	2	2
	3	4	1
	1	3	3
	3	4	1
	0	2	2
	3	1	1
	1	2	2
	3	4	1
	0	3	3
	1	2	2
	3	4	1
	1	3	3
	3	4	1
	0	2	2
	3	1	1
	1	2	2
	3	4	1
	0	3	3
	1	2	2
	3	4	1
	1	3	3
	3	4	1
	0	2	2
	3	1	1
	1	2	2
	3	4	1
	0	3	3
	1	2	2
	3	4	1
	1	3	3
	3	4	1
	0	2	2
	3	1	1
	1	2	2
	3	4	1
	0	3	3
	1	2	2
	3	4	1
	1	3	3
	3	4	1
	0	2	2
	3	1	1
	1	2	2
	3	4	1
	0	3	3
	1	2	2
	3	4	1
	1	3	3
	3	4	1
	0	2	2
	3	1	1
	1	2	2
	3	4	1
	0	3	3
	1	2	2
	3	4	1
	1	3	3
	3	4	1
	0	2	2
	3	1	1
	1	2	2
	3	4	1
	0	3	3
	1	2	2
	3	4	1
	1	3	3
	3	4	1
	0	2	2
	3	1	1
	1	2	2
	3	4	1
	0	3	3
	1	2	2
	3	4	1
	1	3	3
	3	4	1
	0	2	2
	3	1	1
	1	2	2
	3	4	1
	0	3	3
	1	2	2
	3	4	1
	1	3	3
	3	4	1
	0	2	2
	3	1	1
	1	2	2
	3	4	1
	0	3	3
	1	2	2
	3	4	1
	1	3	3
	3	4	1
	0	2	2
	3	1	1
	1	2	2
	3	4	1
	0	3	3
	1	2	2
	3	4	1
	1	3	3
	3	4	1
	0	2	2
	3	1	1
	1	2	2
	3	4	1
	0	3	3
	1	2	2
	3	4	1
	1	3	3
	3	4	1
	0	2	2
	3	1	1
	1	2	2
	3	4	1
	0	3	3
	1	2	2
	3	4	1
	1	3	3
	3	4	1
	0	2	2
	3	1	1
	1	2	2
	3	4	1
	0	3	3
	1	2	2
	3	4	1
	1	3	3
	3	4	1
	0	2	2
	3	1	1
	1	2	2
	3	4	1
	0	3	3
	1	2	2
	3	4	1
	1	3	3
	3	4	1
	0	2	2
	3	1	1
	1	2	2
	3	4	1
	0	3	3
	1	2	2
	3	4	1
	1	3	3
	3	4	1
	0	2	2
	3	1	1
	1	2	2
	3	4	1
	0	3	3
	1	2	2
	3	4	1
	1	3	3
	3	4	1
	0	2	2
	3	1	1
	1	2	2
	3	4	1
	0	3	3
	1	2	2
	3	4	1
	1	3	3
	3	4	1
	0	2	2
	3	1	1
	1	2	2
	3	4	1
	0	3	3
	1	2	2
	3	4	1
	1	3	3
	3	4	1
	0	2	2
	3	1	1
	1	2	2
	3	4	1
	0	3	3
	1	2	2
	3	4	1
	1	3	3
	3	4	1
	0	2	2
	3	1	1
	1	2	2
	3	4	1
	0	3	3
	1	2	2
	3	4	1
	1	3	3
	3	4	1
	0	2	2
	3	1	1
	1	2	2
	3	4	1
	0	3	3
	1	2	2
	3	4	1
	1	3	3
	3	4	1
	0	2	2
	3	1	1
	1	2	2
	3	4	1
	0	3	3
	1	2	2
	3	4	1
	1	3	3
	3	4	1
	0	2	2
	3	1	1
	1	2	2
	3	4	1
	0	3	3
	1	2	2
	3	4	1
	1	3	3
	3	4	1
	0	2	2
	3	1	1
	1	2	2
	3	4	1
	0	3	3
	1	2	2
	3	4	1
	1	3	3
	3	4	1
	0	2	2
	3		

ホボ 2書状 十七 十九

(5) 情態副詞

タガヒニ 1書状 十六 十六

コトゴトク 1書状 十六 十六

マノアタリ 1書状 十六 十六

スデニ 5書状 十九 十六 十四 十六

(8) 動詞

アタハズ 1書状 十九 十六

オヨブ 6書状 十九 十二 十四 十六

キハム 2書状 十七 二八 二五

オソル 2書状 十七 十五 十四

マシマス 1書状 十九 十六

キタル 5書状 十九 十二 十四 十六

フサグ 1書状 十五 十六

ソナフ 1書状 十五 十五

マジハル 1書状 十五 十五

これを出現の頻度順に並べると以下のようなになる。

6書状に見られる語 ザル オヨブ

5書状に見られる語 シカルニ イマダ スデニ キタル

4 書状に見られる語 ゴトシ シム イハムヤ

3 書状に見られる語 ズシテ

2 書状に見られる語 ザレ ホボ キハム オソル

1 書状に見られる語

シカルヲ シカラバ カルガユヘニ ネガワクワ タガヒニ コトゴトク マノアタリ アタ
ハズ マシマス フサグ ソナフ マジハル

頻度の高い漢文訓読語が何を意味するのか、これだけでは判断できないが、仮に3書状以上に出現する漢文訓読語のザル、オヨブ、シカルニ、イマダ、ステニ、キタル、ゴトシ、シム、イハムヤ、ズシテ等を見ると、男性1・男性2・女性宛の各書状に広く見られるものである。これらは性差、有識差を問わず日常言語生活に浸透している語群と見ることができようか。なかでも複数の書状で使用されながら、男性1の書状には見られないものがイマダ、ゴトシ、ズシテなどである。これらの訓読語は鎌倉時代初中期にはどのような性格なのであろうか。

四 漢文訓読語と性差・有識差

漢文訓読語の性格を性差・有識差という視点で検討してみる。

女性宛書状に見られる漢文訓読語をまとめると以下のようなになる。

四書状に見られるもの 無し

三書状に見られるもの ゴトシ ザル イマダ

二書状に見られるもの シム ズシテ シカルニ ステニ オヨブ キタル

一書状に見られるもの ザレ カルガユヘニ ネガワクワ イハムヤ タガヒニ コトゴトク マノアタリアタハズ

キハム マシマス フサグ

男性宛書状に見られる漢文訓読語をまとめると以下ようになる。

男性1 四書状に見られるもの 無し

三書状に見られるもの 無し

二書状に見られるもの ザル イハムヤ ホボ スデニ オヨブ キタル

一書状に見られるもの シム ザレ シカルニ シカルラ オソル

男性2 二書状に見られるもの シカルニ イマダ オヨブ

一書状に見られるもの ゴトシ シム ザル ズシテ シカラバ イハムヤ スデニ オソル キタル

ソナフ マジハル

女性宛の複数の書状にあらわれるゴトシ、ザル、イマダ、シム、ズシテ、シカルニ、スデニ、オヨブ、キタル等は男性2宛にもほぼ見られるものである。具体例を見てみる。

書状の中には式子内親王に宛てられた二四四行の長文の書状がある。死を間近にした内親王が師の法然に面会を求めた、その書状への法然の心のこもった慰めの返書である。そこにはいわゆる二形対立の一例を挙げれば「ズシテ―で」は、すべて和文語「で」の6例が見られるのである。(以下用例の附訓は省く)

・ イテアリキ・候ハテ・念佛申シ候ハヤト・オモヒハシメタル事ノ・(下本九三五)

又別に、北条政子宛の一六二行の書状がある。これは頼朝夫人からの宗教上の問いに対する法然の懇切な返書である。式子内親王の場合と違って「ズシテ」が8例、「で」が1例見られるのである。

・ 経ヲ・カキ・僧ヲ・供養セムコトハ・コノロ・ミタレスシテ・慈悲ヲ・オコシテ(中末九五五)

このように漢文訓読語の使用は、書状の内容に大きく作用され、性差が語彙使用の決定的な要因でないことは理解できる。しかし総量に於いて前述のように二人宛の書状には他の語彙も検討すると、和文語の方が多く見られたのである。

五 直筆書状の漢文訓読語との比較

当時の他の直筆仮名書状で漢文訓読語の検証を行つてみよう。

1 女性仮名書状の漢文訓読語

(1) 藤原為房妻仮名書状(四三通、応徳元年(一〇八四)十二月カ、寛治七年(一〇九三)カに書写)

ザル5(ぬ17)、カタナ2(たち0)

・いとくあさまじうたゝの事にはべらぎめ□(り)(第一通9行)

(2) 恵信尼仮名書状⁽⁶⁾(十通、建長八年(一二五六)く未詳)三月十二日あの時、に書写)

ゴトシ1(やうなり1)、ザル1(ぬ11)、ズシテ1(で4)、イマダ(くズ)3(まだ(くズ)0)、アルイハ1(あるは0)、タマタマ1(たまさかに0)、フサグ1(ふたぐ0)がみられる。

・た、おともせずしてふしておはしませば御身をさぐればあた、かなる事火のごとし(第五通10行)

・たよりにて候しかばたしかにや候はざるらんとてこれたしかのたよりにて候へは(第二通6行)

・た、おともせずしてふしておはしませば御身をさぐればあた、かなる事火のごとし(第五通8行)

・き、候へどもいまだひろうせぬ事にて候也(第十通42行)

女性の直筆仮名書状のうち、平安末期書写の為房妻の書状は、子どもが修学している比叡山の師に宛てたものであるが、圧倒的に和文語の使用が多いことが確認できる。ザルとカタナの2語のみが訓読語であった。平安末期からザルはこういう書状にも顔をみせる性質(漢文訓読語のなかでも日常言語生活に見られるような訓読語か)の語なのであるうか。

恵信尼の書状は、為房妻からおよそ一七〇年後に書写されたものである。越後から夫親鸞と共に上京した末娘の覚信尼宛に出されたもので、他人宛の書状よりは語彙も気取ることなく使用することが出来るものと思われる。そこには日

常の言語生活がより反映しているものとみてよからう。恵信尼の書状にも和文語の使用が多い。漢文訓読語の陳述の副詞イマダ(ゞズ)も結びはゞズが見られない。「いまだく候」「いまだくぬ」「いまだく候やらん」等のみで和漢混淆型とでもいふべき用法になっている。恵信尼は基本的には和文語使用だが、漢文訓読語も為房妻に比べると増加していることがわかる。宗教者の妻という環境が、更に時の経過が女性の使用語彙に漢文訓読語を増加させたものと見られる。

恵信尼使用のゴトシ、ザル、ズシテ、イマダ(ゞズ)、アルイハ、タマタマ、フサグの7語等は鎌倉時代の女性の日常語に浸透している訓読語と見られ、中でも西方指南抄の女性宛、男性2宛書状でも見られたゴトシ、ザル、ズシテ、イマダ等がより基本的な訓読語と見られるものである。法然の受信者を意識した語彙使用がこれらの語から裏付けられる。

2 男性仮名書状の漢文訓読語

(1) 法然仮名書状(断簡五通)

ズシテ1(で1)、トモガラ1(ひとびと0)

・ ちしやのふるまいをせずして只一かうに念仏すべし(一枚起請文12行)

(2) 親鸞仮名書状(十二通)

ゴトシ1(やうなり0)、シム1(す16・さす3)、ザル1(ぬ3)、ザレ1(ね5)、ズシテ2(で0)、コノユエニ2(されば1)、シカルニ1(されど0)、シカルヲ1(さはあれど0)、イハムヤ1(まさにゞむや)0、イマダ(ゞズ)2

(まだ0)、スデニ1(はやう0)、マシマス3(おはします4)、オヨブ1(いたる3)

・ 弥勒はいまた佛になりたまはねとも(十通7行)

法然の書状は断簡のみで性格を十分に把握し難いが、親鸞の直筆書状で現存するものは帰洛後関東に残した信者達に発信されたものである。そこには師の法然と比べ漢文訓読語の増加が窺われる。しかも接続詞類使用が多いことがひとつの特徴である。コノユエニ、シカルニ、シカルヲ等が見られ、文の接続部をわざとぼかした平安仮名文学とは異なる

性格を示している。ところが訓読語のイマダの結びは惠信尼同様「くぬ」形がみられ和漢混淆型も見せている。惠信尼に見られたゴトシ、ザル、ズシテ、イマダ等は親鸞書状にも見られ、法然にもズシテはみられた。これらは日常言語生活に浸透した最たる訓読語とみられよう。

六 むすび

東辻保和博士は鎌倉時代の男女の九人の日記から、鎌倉時代和文の二形対立を分析されて「漢文訓読特有語の中には、対立する和文語を殆ど吸収したかと思われるような語の存在」を指摘されている。⁽⁹⁾ 代表例として「まだ」を吸収したかと思われるイマダを挙げておられる。又、後藤英次氏は、鎌倉時代の助詞・助動詞類の二形対立について「口頭語資料」と認められる資料の分析から、「漢文訓読特有語性が弱いもの」「口頭語」的要素と共起しやすい語から「漢文訓読特有語性が強いもの」「口頭語」的要素と共起し難い語へと次のような結果を得ている。⁽¹⁰⁾ それはゴトシなどは訓読特有語性が弱く順次、ベカラズ・ズシテ・クシテ・ザル・ザレ・ムトス・ニシテ・トイヘドモの順に漢文訓読特有語性が強くなるといわれる。先学の帰納結果は西方指南抄掲載書状の分析とほぼ一致する。本稿は僅かな分量の分析ではあるが、鎌倉時代初中期には性差や有識差を問わず日常言語生活に浸透していた漢文訓読語類が存し、それを認識していた書状の書写者が存したことを記述してみようとしたものである。

注

- (1) 西方指南抄 (三重県津市・高田専修寺蔵) 『親鸞聖人真蹟集成』第五・六卷 (法蔵館 昭和四八年五月・十月)
- (2) 拙稿「男女差と表記差——夫婦の漢語の表記を視点として——」(『文化言語学』その提言と建設) 平成四年十一月 三省堂
- 拙稿「平安鎌倉時代の仮名書状について——漢語とその表記を視点として——」(『築島裕博士古稀記念 国語学論集』 平成七年十

月 汲古書院)

- (3) 築島裕『平安時代漢文訓読語につきての研究』(昭和三八年 東京大学出版会)
築島裕「土佐日記と漢文訓読」(『新註国文学叢書 土佐日記』 講談社 昭和二十六年十二月)
- (4) 井上親雄「西方指南抄における打消の助動詞」(『鎌倉時代語研究』第十一輯 昭和六三年八月 武蔵野書院)
来田隆「院政鎌倉時代における片仮名文の接続詞」(『鎌倉時代語研究』第十一輯 昭和六三年八月 武蔵野書院)
- (5) 久曾昇昇編『平安仮名書状集』(汲古書院 平成四年)、同『平安時代仮名書状の研究』(風間書房 昭和四三年)
金子彰・東京女子大学日本文学科学学生有志「藤原為房妻仮名書状 語彙総索引稿」(『東京女子大学 日本文学』 第八十七号、一九九七年三月)
- (6) 恵信尼書状『恵信尼文書』(法蔵館 昭和五三年)
金子彰・伊藤守「恵信尼書簡総索引稿(上)(下)」(『新潟大学教育学部紀要』第二七卷第一号、第二号、昭和六十年十一月、昭和六十一年三月)
- (7) 法然直筆書状『法然上人真蹟集成』(法蔵館、昭和四九年)
拙稿「法然上人直筆起請文・仮名書簡総索引稿」(『新大國語』第12号、昭和六一年三月)
- (8) 親鸞直筆書状『親鸞聖人真蹟集成』第四卷(法蔵館 昭和四九年十一月)
拙稿「鎌倉時代の仏教者の語彙について——法然と親鸞の仮名書状に見られる和文語と漢文訓読語——」(『東京女子大学比較文化研究所紀要』第五九卷、一九九八年一月)
拙稿「平安末期と鎌倉中期の女性仮名書状の語彙について——為房妻、恵信尼、西方指南抄の和文語と漢文訓読語——」(『東京女子大学 日本文学』第九一号、一九九九年三月)
- (9) 東辻保和「鎌倉時代和文について」(『鎌倉時代語研究』第十輯 昭和六二年五月 武蔵野書院)
- (10) 後藤英次「漢文訓読語の変容——鎌倉時代の「口頭語資料」の検討から——」(『文芸研究』133、一九九三年五月)
- 付記 本稿は、科学研究費(基盤(C-2)) (平成九く十一年度) (『日本語史研究基礎資料としての親鸞聖人真蹟遺文の総合語彙索引の作成』) の成果の一部に基づいたものである。